

# 〱ホームレス歌人〱のいた冬

## 横浜・寿町にその足跡を求めて⑤

ジャーナリスト

三山 喬

東京の日比谷公園に「年越し派遣村」のテントが立ち並び、ホームレスとなった人々が溢れる映像に、日本中が衝撃を受けた一昨年の冬。その同時期に、同じような思いから注目を集めたのが、「朝日歌壇」に現れた「ホームレス歌人」公田耕一氏の存在だった。短歌への反響や作者への呼びかけが次々と紙面に載り、本人も投稿を続けながら、昨年九月を境に紙面から消えた謎の歌人が、私たちに訴えたものは何だったのか。その彗星のような足跡と、彼が住んだという横浜・寿町の現状を、三山氏が追った。

### 二百人のホームレスが住む街

JR京浜東北線・関内駅かんないから石川町方向に約三百五十メートル。オー

トロック式のマンションが建ち並び、高架線越しにスタジアムが見える新横浜通りを信号で右折すると、横切る電線の低さが妙に目立つ、昭和の匂いのする通りに入り込む。

往來に椅子を持ち出したり、道端に座り込んだりして語らう年輩者の姿がそこかしこに見える。立ち飲みができる酒屋では、日中から路上に客がはみ出している。

「〇〇荘」と書かれた簡易宿泊所がひしめくここの寿町一帯は、日本三大ドヤ街のひとつとして知られるが、今日ではドヤといえども、こぎれいに塗装されたコンクリートビルばかりだ。内部をのぞいても、廊下のドア数こそやたらに多いものの、普通の集合住宅とさほど変わりはない。

一夜だけの宿泊も可能なのか。玄関脇の小窓から管理人に聞くと「ウチはダメ」と二軒で断られ、屋号に「ホテル」の名がついた三軒目で、ようやく部屋が見つかった。

問われるまま名字だけ伝え、二百二十円を支払う。あてがわれた四階の三畳間には、畳まれた布団とテレビ、そしてエアコン。管理人に鍵を求めると、「鍵代は別に五百円」と言われ、ならいい、とカバンを持っ

たまま、私は外出した。

《話をしようよ》

NPO法人「さなぎ達」がすぐ近くに営む談話施設「さなぎの家」には、そう大書した横断幕が掲げられていた。寿町周辺にいるホームレスやその予備軍をサポートするグループである。もともと大衆食堂だった店舗跡にソファが並べられ、男女の高齢者数人が話し込んでいる。カ

ウンターの奥には、自立を試みるホームレスに与えるため、背広が何着も吊るされている。

「ホームレスの問題は、単純な雇用の話じゃない。何らかの事情で社会との関わりを断った人、あるいは断たざるを得なかった人。背景は一人ひとり違うんです。精神的な障害を持つ人もいれば、それこそ昔、大学教授だったような人までいます」

二階の和室に招き入れてくれた事務局長・桜井武磨さんは、まずそのことを強調した。

戦後、港湾労働を中心とする日雇い仕事の「寄せ場」としてドヤ街が形成された寿町は、港湾作業の機械化やバブル崩壊を経て、「日雇いの街」から「生活保護を受ける高齢者の街」へと変貌した。

約百二十軒にのぼるドヤの入居者も、もはや大半を高齢の元労働

者<sup>者</sup>が占め、今や地区住民六千数百人の八五パーセントが生活保護の受給者だという。そして、街の周辺には常時、二百人前後のホームレスが野宿生活をしている。

「リーマンショックで失業したから、なんて急に人が増えることはありません。それはマスコミの人が勝手に抱くイメージ。実際には、ここに来ても仕事なんかありませんから」

午後九時が近づくと、二十人を超すボランティアが施設前に集まった。隔週で行なわれる「木曜パトロール」のためだ。台車にスूप入りのポットを載せ、毛布や衣類を携えて、ふた組のグループが発発した。私は、横浜スタジアムから関内駅周辺に向かう一行に同行した。

「髭そりはある？」

「ありがたい」

「困ったことはない？」

●みやま・たかし 1961年神奈川県生まれ。東大経済学部卒業。朝日新聞記者を経て南米ヘルーに移り取材活動を展開。帰国後の著書に『日本から一番遠いニッポン』がある。